

特攻を見送る写真に関する考察

坂元 恒太

はじめに

昭和二十（一九四五）年四月十二日に、知覧飛行場で撮影された一枚の写真がある（図1。以下、この写真）。これから出撃しようとする陸軍特別攻撃隊員を知覧高等女学校（以下、知覧高女）生徒らが、桜の枝を手に見送る場面である。この写真は、戦後から現在に至るまで、特攻の史実を紹介する際にしばしば用いられている。例えば、村永薫編『知覧特別攻撃隊』（注1）、南日本新聞社編『特攻この地より かごしま出撃の記録』（注2）や、中学校社会科教科書『新しい日本の歴史』等に掲載がある（注3）。

知覧特攻平和会館では、従来よりこの写真を館内で展示し、知覧における特攻の史実を象徴するものとして取り扱ってきた。そして平成三十一（二〇一九）年四月、リニューアルした戦史資料室のメインコーナーとして、写真が撮影された日に書かれた女学生の日記と、日記記述者の証言映像とを併せて、この写真を紹介する展示を新設した。

当館では、以前からこの写真は毎日新聞社が撮影したもので現在でも画像データの使用に関するサービスを提供していることは認識していた（注4）。筆者らは、戦史資料室のリニューアルを準備する中で、あらためて初出文献及び写真原本の所在を確認する必要性を感じていた。そこで、国立国会図書館のデータバンクにて調査をした結果、毎日新聞大阪本社版の昭和二十（一九四五）年四月十七日付

け朝刊に掲載されたものが初出であることを確認した。そして、原本の所在について毎日新聞社に問い合わせたところ、大阪本社に保管されていることを確認した（注5）。

先述したように、当館では知覧高女の一人、故永崎（旧姓前田）笙子さんが記した当時の日記（注6）、彼女の証言映像を有している。このように、写真・日記・証言と三つの記録から一つの場面にアプローチできる事例は他に知らない。戦争体験者が今後ますます少なくなっていく中で、特に写真が語る情報の重要性は高まりつつある。



図1 特攻を見送る写真（毎日新聞社撮影・所蔵）

一・研究の目的と方法

(1) これまでにわかっていること① 日記の記述より

この写真に関して研究された事例はほとんど確認できないが、知覧高女の「特攻日記」における記述から、撮影された年月日及び、特攻機に乗る特攻隊員の名前まで知られており、知覧特攻平和会館の展示などでも紹介されてきた。

「特攻日記」は、昭和二十（一九四五）年三月二十七日から四月十八日までの二十三日間に知覧基地の三角兵舎で特攻隊員らと接した日々を綴った日記である。平成二十七年に南九州市指定文化財、有形文化財（歴史資料）に指定されている。特攻を見送るこの写真が撮影された場面が記された、四月十二日の記述を抜粋する（注7）。

○前田笙子筆、なでしこ隊「特攻日記」（抜粋）

「今日は晴の出撃、征きて再び歸らぬ神鷲と私達をのせた

自動車は誘導路を一目散に走り飛行機の待避させてある

ところまで行く。途中「空から轟沈」の唄の絶え間はない。

先生方と隊長機の擬装をとって上げる。腹に爆弾をか、へた

隊長機のプロペラの廻轉はよかった。本島さんの飛行機もブン

ブンプロペラがうなりを立てゝゐた。どこまでやさしい隊長さんで

せう。始動車にのせて戦闘指揮所まで送られる。後を

振りかへればくびに可憐なレンゲの首飾りをした隊長さん、

本島さん飛行機にのつて振り向いていらっしやる。櫻花にうづまつ

た飛行機が通りすぎる。私達も差上げなくてはと思つて兵舎へ

走る。途中、上機謙（嫌）な河崎さんおっかなく自転車にのつてくるのに會ふ

人は走っても走っても走りきれない位まで忙がしくかけ廻つてゐるのと思ふ

と少々腹立、しくなつて声をかけられても答へるのさへ面倒臭かつた

櫻花をしつか（り）と握り一生懸命馳せつけたときは出発線へ行つてしまひ、すでに滑走しようとしてゐる所だ。遠い爲走つて行けぬのが残念だった。本島機が後れて目の前を出発線へと行く

と、隊長機が飛び立つ。つゞいて岡安、柳生、持木機、九七

戦は翼を左右に振りながら、どの機もどの機もにっこり笑つた。

操縦者がちらつと見える。二〇振武の穴澤機が目の前を行きすぎる。一生懸命お別れのさくら花を振るとにっこり

笑つた。きり、鉢巻姿の穴澤さんが何回と敬礼なさる。

パチリ・・・後を振り向くと映畫の小父さんが私達をう

つして満足してゐる。特攻機が全部出て行つてしまふと

ほんやり飛行機の去つたのも知らぬかの様立つて南の空を

何時までも見てゐる自分だった。何時か目には涙が溢れ

出てゐた。

何も話す気はせず皆んなで歸らうとすると、本島、渡井さん

本島さんは男泣きになきながら「どうしたの」とおききすると「今日ね、

爆弾が落ちて行けなかつた。隊長さんの所へ行くと（本島、後から

こいよ。俺はあの世で一足先きに行つて待つてをるぞ」と言はれたんだ。

思はず残念で隊長機の飛び去つて居つた後、一人で思ふ存分泣いた」

とのこと。渡井さんも「ほんとうにすみませんでした」と涙ぐんでゐらっしやる。

私達も今までこらへてゐた涙が一度にこみ上げてみんなで泣いたのだった。その夜、隊長さんのお通夜だと言つて酒のまれず

今日いらつしやつた堀井さんがじよう談をおつしやつても只ほんやり

ときいていらつしやるだけだった。「本島、本島」と部下愛の深かつた

隊長さんを思ひ出すと泣けるから黙つてゐてくれとおつしやる。

立派な隊長さんと一諸（緒）に体当り出来得ず又第二次總攻

撃に参加出来なかつたのが残念だったこととせう。」

(2) これまでにわかっていること② 元女学生の証言より

この日記が書かれた状況について、知覧特攻平和会館の八巻聡は平成二十(二〇〇八)年に永崎(旧姓・前田)笙子さん本人に聞き取り調査を行っており、同館紀要第一号に報告している。以下、四月十二日に関する部分のみ抜粋する(注8)。

八巻 「なでしこ隊の方々が特攻機を見送っている写真(昭和

二年四月十二日、戦闘指揮所前で撮影)がありますが、出撃があるたびにこのように見送っていたのでしょうか？」

永崎氏 「いいえ、このような形で見送ったのはこの日だけです。

四月十六日も見送りましたが、その時は飛行学校の格納庫の前からで、特攻機はそこから霜出小学校の方へ飛んで行きました。見送っている写真は出発線に行くところですよ。穴澤機が行かれてますので、四月十二日の第二次総攻撃です。穴澤さんが一番最後でした。前の飛行機は桜をすっごく、操縦席の中を桜で一杯にして、全部桜で埋めた飛行機だったんですよ。」

八巻 「その特攻隊員の方が、そうされたのでしょうか？」

永崎氏 「乗っている方が自分で桜を挿されたのですが、それがね、お顔がわかんないぐらいに桜で一杯にしていたんですよ。穴澤さんは太さ四センチぐらいの鉢巻をされていたんですよ。見送ってるなでしこ隊の方々のお名前は全部わかっています。」

八巻 「この日だけは見送りをするように言われて行かれたのでしょうか？」

永崎氏 「特別言われたような気もしないんですけど、私は兵舎

の前から誘導路に行く特攻隊と同じトラックで行って、隊長機が一番手前にありましたので、そこで先生方と私も降りたんですよ。穴澤機なんかはその奥の方に置いてあったと思うんですよ。」

八巻 「下ろされた場所では、特攻機はまだ掩体壕の中に入っていたのでしょうか？」

永崎氏 「掩体壕じゃなくて地べたでしたよ。周囲は少し木があるところでしたが土の上にむき出しで二機あって、それは九七戦でしたが、一番手前が隊長機だったので、そこで先生方と皆で降りたんです。奥まで行った人はいないと思います。最初、隊長機の擬装を取って、続いて本島機と二機分の擬装を取って、それから隊長さんが手を上げて始動車を止めてくださいましたので、『この始動車に乗って戦闘指揮所まで行きなさい』と言われましたから、それに乗って行きました。それで、戦闘指揮所前に並んだわけです。」

八巻 「皆さんが見送りに持つてる桜は、どこから持って来たのでしょうか？」

永崎氏 「この桜、私は自宅からです。家には八重桜の木が二本あったんです。あまり大きくなかったんですが、祖父は塩釜桜と言っていましたよ。その桜の木から朝、枝を折ったんですがもうこれはかなり散ってたんですよ、散り始めてました。」

八巻 「この日だけ、桜の枝を持って行くように指示されていたのでしょうか？」

永崎氏 「いいえ、たまたま私は自分で持つて行きました。指示はなかったです。」

八巻 「見送りの時は、どのような気持ちで見送られたのでしょうか？」

永崎氏 「私は特攻機に付いている爆弾が怖かったです。普段は積んでいまして、実際付いてるのを見て足がガタ・ガタ・ガタ・ガタとずっと震えて、震えてもう正視出来ない感じでした。その怖い思いと、何か色んな思いがありました。もう最後のお別れで出発線に向かう所ですし、辛い気持ちとお顔を知っていましたので。

でも、本当に一番最初に爆弾に目がつきました。ウワ、爆弾を積んでらっしゃる、と思ってもう本当に足の震えが止まらなかったです。」

八巻 「永崎さんの日記には、この写真を撮られたことについて書かれていますが、報道関係者か軍のカメラマンがいたのでしょうか？」

永崎氏 「すぐ後ろにいました。新聞記者だったみたいです。日記には映画のおじさんと書いていますが、その時はそう感じたんでしょうね。」

(八巻二〇一九より抜粋)

以上のように、日記の記述と八巻による聞き取り調査から、四月十二日にこの写真が撮影された経緯として、次の点が明らかになっている。

- ・ 知覧高女の女学生らは、第六十九振武隊の飛行機が操縦席を桜でいっぱいしているのを見て、自分たちも桜を差し上げようとした。
- ・ 自宅から持参していた八重桜の枝を、戦闘指揮所から三角兵舎まで往復2kmを走って取りにいった。

・ 戻った時には、すでに第六十九振武隊は出発線まで移動しており、第二十振武隊の穴澤利夫大尉^(注9)の飛行機が出発線に向かうために目の前を通過するところだった。

・ そこで、第六十九振武隊に差し上げるはずだった桜の枝を手に持ったまま振って見送った。この場面を「映畫の小父さん」が写真に収めた。

つまり、彼女らが桜の枝を三角兵舎に取りにいつて戻ってきた時に、桜の枝を隊員へ渡すことが間に合わなかったために、桜を手にとって振った場面を撮影したものだということである。桜を手に見送るといふ構図は、撮影者側が意図的に設定したわけではなく、偶発的に発生したものであったことが、これまでに明らかになっている。

その他、永崎さんは、この写真に写る女学生のモンペの柄模様の記憶を元に、写真右端から高城ミツ子さん、馬場フミ子さん、森カヨ子さん、田中米(ヨネ)さん、平田祥子さん、森幸子さん、帖佐房子さん、迫ツル子さんであることを特定して、知覧高女でこの会のメンバーと共有していた。

(3) 目的と方法

それでは、桜の枝がなぜ三角兵舎に置いてあったのか、また、偶発的に撮影された写真がよく知られるようになったのはなぜか、さらには撮影された現場はどのような状況だったのかという疑問がわく。

それを紐解くために、まず、知覧飛行場での彼女らの様子を客観的に伝える資料として、この写真の初出文献である新聞記事と当時の地元紙における関連記事を提示し、どのように報道されたのかを検証する。次に、戦後の出版物にどう掲載されたのか、閲覧が可能

な範囲ではあるが古い年代の事例を示し、この写真が知覧での特攻の史実を伝える象徴的な存在になっていった過程を考える。また、「特攻日記」の記述者の証言を裏付けるために、学友の方々から得られた証言を採録する。最後に、この写真が撮影された場所を特定する作業を行う。近年、過去に撮影された古写真と同一構図で撮影して比較する「リフォトグラフィ」や「メモリーグラフ」^{〔注10〕}といった研究分野がある。本稿でも、知覧飛行場でビフォー・アフター写真を比較して、当時の状況を再現することを試みる。

このように新聞記事、戦後の出版物、日記や証言の裏付け、撮影現場の検証といった四つの視点から考察する作業を通じて、この写真の持つ歴史的意義について考えてみたい。

二. 当時の新聞記事

(1) 写真の初出文献

毎日新聞大阪本社版、昭和二十(一九四五)年四月十七日付け朝刊記事が、初出文献であると思われる。「陸軍航空部隊某基地にて村山、早川報道班員(本社特派員)発」の記事で、「**鍬を揮ふ特攻隊**」「**花と特攻隊**」「**整備員と特攻隊**」の三つの項の文章と四枚の写真から構成されている。この写真と対応する記事本文は、このうちの「**花と特攻隊**」である。写真の説明文には、「**櫻花を手に振武隊出撃送る女子整備員**」と説明が付されている。記事本文を以下に抜粋する(波線は筆者が付加した)。

① 毎日新聞大阪本社版 昭和二十年四月十七日付け朝刊第2面

〔注1〕

記事見出し1…老婆に、直掩、麦の中耕

記事見出し2…出撃を前に朗かな特攻勇士

【**陸軍航空部隊某基地**】^{〔ア〕}にて村山、早川報道班員(本社特派員)発「私達がここに来てからもう十日以上になる。私達はここに来る時何か異様な感動に包まれた表情や興奮した息遣ひを身近に感ずるものと予期してゐたが若き神鷲には朗かな笑ひと明るい顔透き通つた眼と若々しい情熱だけが満ち溢れてゐた、いま神鷲の生活を綴つてみよう」

鍬を揮ふ特攻隊

爽かな初夏の風が青い麦の穂波をかきたててゐた、息子一人に孫二人を戦地に送つた**寺師ツイさん**(六四)^{〔イ〕}は曲る腰を叩きながら中耕に汗を流してゐた「お婆さん、大変だなあ、さあ加勢しますよ」道路上から降りてきた特攻服だつた「中耕は早くやらなきゃ駄目だよ」オ少尉(福島師範)^{〔ウ〕}は素早くお婆さんから鍬をとりどんなに耕しはじめた、すると通りかかつた神鷲二人が「やあ隊長殿直掩に來ました」と下りてきた、お婆さんは済みません、済みませんと口の中でいひ続けた

花と特攻隊

女學生たち^{〔エ〕}には神鷲はみんな親しい兄さんである、八重桜、山吹、木蓮、つつじ、れんげ草色とりどりの花を摘んで来ては部屋一ぱいに飾り操縦席の中に手製の人形をくくりつけるのも彼女たちの嬉しい仕事だ、出撃のとき**宿舎の上**^{〔オ〕}を一旋回して「さやうなら」の合図をする、振る翼にいつまでも見送る可愛い手の数々遅れじと散りゆく花ぞわれもまた大和島根の香りとどめて、彼女たちの大事な手帳に書き残されたキ少尉^{〔カ〕}の辞世である

整備員と特攻隊

出撃命令は下つた、愛機の傍に駆けつけたオ少尉に「準備完了」と

呼ぶム軍曹^(キ)の姿が頼もしい、爆装もがっちりしてゐる、燃料も大丈夫だ、一と通り点検して歩くオ少尉のあとから確信のあるム軍曹の説明がついてゆく、計器、操縦棒、方向舵を一々あたつたオ少尉は「御苦労！」と感謝した。○○飛行場以来、影の形に添ふ如く来た整備員である、出撃すれば再び会へない整備員である、草の原にオ少尉を囲んで整備員達は輪をつくつた、二合瓶の別れの酒が出た

「おい飲め、朗かに歌つてくれ」

オ少尉が勧めた

「今はおたちがお名残惜しやダンチヨネ」

「咲いた桜が男なら」

と次ぎ次ぎに一つ一つ歌つていった、哀傷の影はどこにもない

【写真説明】

- ① 出撃命令待つ間の一刻鋏を執る振武隊員
 - ② 女子整備員も神風鉢巻締めて特攻機整備
 - ③ 桜花を手に振武隊出撃送る女子整備員^(ク)
 - ④ 特攻隊最後の無電を必死で受ける電信兵^(ケ)
- 「いづれも早川報道班員撮影」

(2) 関連記事

南日本新聞社のデータベースにて、昭和二十年四月十二日前後の記事を電子データから閲覧した結果、知覧高女の動向がわかる記事として次に挙げる鹿兒島日報^(注12)の記事三点を見つけることができた。記事は「○○基地」と地名は伏せられているが、掲載されている人名などから、いづれも知覧で取材された内容であることがわかる。

四月九日記事に登場する女学生は、前田笙子さん・平田祥子さん・

森要子さん・佐多よね子さん、岩脇福子さん・岩脇ヤスさんのことであると思われる^(注13)。岩脇姓は二人いたことがわかっているが、記事中の「安さん」が岩脇ヤスさんのことであると思われる。女学生の奉仕作業は特攻隊員担当と飛行戦隊担当と分かれていたが、ここに挙げた方々は特攻隊員担当であったことがわかっている^(注14)。四月十二日記事に登場する「振武隊長甲斐少尉」は、知覧を経由して徳之島から出撃している。四月十五日記事で談話を述べている上野とみ子さん・馬場みつ子さんは、知覧高女である^(注15)。

以下、記事本文を抜粋する（判読不明文字は□で示した。波線は筆者が付加した）。

- ① 鹿兒島日報 昭和二十年四月九日付け朝刊 第2面^(注16)

記事見出し1…素朴な室に花一輪

記事見出し2…出撃前の神鷲を語る

【勤□の女学生たち

【○○基地川越特派員】

林間の春草の上をはつて清潔な曉闇の朝露が静かに柔かな朝の光をいぶし銀のやうにとかしてゐる現地民の心盡しの蒲團にふかぶかと埋まつて無心に眠つてゐる若い神鷲達の顔はどの顔もまだ少年の名残が消え失せてゐない或ひは腕を蒲團の外にひろげ或ひは横向きに思ひ思ひの恰好でスヤスヤと眠つてゐる姿はこの人達が今日の薄暮を期して洋上遙か火の突撃を敢行する神鷲であるとはどうしても考へられない、部屋のとどころに空瓶を利用して菜の花や椿が無造作に活けてある、物置のやうに粗末な兵舎の内これだけが何となくあけない飾りのやうな存在である、特攻隊の兵舎に勤労奉仕に来てゐる土地の○○高女二年の女学生たちがせめてもの心盡しに

活けたものである、^(ヨ) 神鷲達のもとには遠くは満州や東北の女學生から血書の日の丸や和歌が届けられてゐるが、神鷲はいづれもこれらの贈物を大事に飛行帽の下や胴にシツカリ巻きつけて出撃してゐる、若い神鷲たちとこれらの女學生とは殆んど一つか二つしか歳は違はない、この兵舎に来てゐる高女の勤勞奉仕の女學生達にも「君等を見ると俺の妹のことを思ひ出す、敵は俺達がやつつける、君等はきつと将来立派な日本のお母さんになつて下さい」と激励してゐると云ふが記者は一日これらの少女達の純真な魂に映つた神鷲のいつはらない姿を聴いてみた、以下は親しく靴下や襦袢を洗濯してやつたり、繕つてやつた幾多の神鷲の出撃を追懷しながら彼女達が互に語る感激である

前田さん^(サ) 出撃なさつた福家兵長^(シ) は、氣にかかることは妹のことだけだといつも言つてゐりました、私達と同學年ださうで、立派な日本の女性になつてくれたら良いかと懷しさうに一緒に育たれた頃の思出などを話してゐりました

私達はほんたうに幸福だと思ひます、日本の兄様たちはみんなこんなに私達のことを突撃の間際まで心配してゐて下さるのです
辻さん 私佐々木兵長^(ス) に出撃の模様を家族の方に知らしてあげますから住所を教へて下さいと言つたら、さうだなあーと考へてゐりました、それでは書いてやらうと地獄県三途川区三丁目草葉の陰、と書いて下さいました^(セ)、佐々木兵長さんにはもうお父さんもお母さんもないのださうで一人も家族の居られない人とは知らず今から思ふとほんとに悪い事を聴いたとつくづく申訳なくいつまでも忘れることが出来ません

佐々木兵長は戰友の人達の中でも一番朗らかでちよつともそんなことには氣付きませんでした出撃が延期になると、「今日も死にそこねた、一日生き過ぎた」と残念がつてゐりました

平田さん 宮崎少尉^(ツ) が「貴女方は敵が上陸して来たらどうしますか」と云はれたので「私達もどうかして一人でも殺します」と答へたら「日本の女の人は死に急ぎをするから決して貴女方は輕々と感傷にまかせて死を急いではなりません」と昔の武將の妻などの話をして下さいました

森さん 最後まで日本の女性だと云ふ誇りを忘れないで頑張つて下さい、敵は私達がやつつけます、と云つて居られました

前田さん 出撃のときみんなに自分の物は全部わけて下さいましたが、私には萬年筆を形見に下さいました^(タ)

私はこの萬年筆で妹のコトミさんと云ふ人に出撃の模様を書いてやるつもりです。その日は次々に四回も出撃なさつたので〇〇神社の境内から折つて来た櫻の枝が足りませんでした^(チ)

佐多さん 櫻の花を差し上げたら貴女方が飛行機の操縦席にさして下さいと云はれましたけれども、女が神聖な飛行機に乗ると穢れると思つて遠慮をしました^(ツ)

岩脇さん 離陸のとき操縦棒を握つて浮き上るまでがほんたうに神の心になる無事に浮いてくれれば良いがほんとにその一瞬だけは純一な心になる、と皆な話して居られました

そして敵の上で艦砲射撃の音を聴けばズンと肚がすわるよと笑ひながら話されました、私が敵がどうせ上陸して来るのだつたら私達も今の内に敵をやつつけた方が良いでしょうから一緒に体當りに連れて行つて下さいとお願ひしたら貴女方はどんな事があつても死んではいけません、立派な日本のお母さんになつて何が何でも残つた人達でお國を守つて下さいと云はれました

安さん 特攻隊の人達によく「昔爺さんと婆さんがあつたとき、爺さんはお山に柴刈りに」と云ふ歌が好きで皆でよく朗かに歌はれます、死ぬなどと云ふことは殆ど口に出来ません

お母さんが亡くなつて居られた人でした、出撃の前の日に嬉しうに空母を土産に明日はお母さんのところへ行けるぞと張り切つて居られました

前田さん 福家兵長は

△菊の香の故國をあとに、我は今惡魔退治に勇み征く
と書いて征かれ岩間兵長^(テ)も

△生をうけたるもの必ず死ぬ、咲いた櫻は必ず散る、残る櫻も散る櫻^(ト)

と悠々出撃なさいました

私は三次ソロモン海戦で戦死をされた叔父さんの寫眞を頼んで一緒に突込んで下さいとお願ひしたら、必ず叔父さんの分まで頑張るから安心しなさいと言はれました」

② 鹿兒島日報 昭和二十年四月十二日付け朝刊 第2面^(注17)

記事見出し1…床し櫻かざして征く

記事見出し2…出撃を前に基地は朗らかな談笑

【陸軍某基地にて特派員発】

『明日は初陣、軍刀に月をかざせば花が散る』葉の花と櫻に囲まれたところに振武隊神鷲達の宿舎があつた

『後方の仲間だつて内地にこんな所があると聞いたらびつくりするだらう』

と神鷲達が口々に語るほど野戦色に満ちた三角兵舎に起居し、生きて還らぬ出撃の日を待機する、この勇士達の日常は肝に銘じて忘れられない、すでに数多くの特攻隊出撃前の日常は幾度となく傳へられ『振武隊の日常』もそれと何等変るものではないが、この神鷲達にとつて何よりも嬉しいものに櫻の花がある、神鷲達はこよなくこ

の花を愛した、誰の枕辺にも一枝の満開の櫻が活けられ、兵舎から飛行場への道すがら胸にかざして^(テ)勇士達はうら若い自分の生命に歓喜を覺へてこの花を抱いて出撃出来る喜びに酔ふのであつた、深夜ふと醒めた私の枕元に櫻が綻びてゐた、この花を通じて安らかな神鷲達の寝顔を日本刀と飛行帽を見て私は祖國の美しさ強さをしみぐと考へ續けた、松の木立を紅で彩つて沈む春の夕陽はまたこよなく美しいがその頃からこゝではもう河鹿が鳴き、小笹の影から秋の虫のやうに小さな無数の声が續く、夕食後神鷲達は兵舎の森かげに朗かな談笑を續け歌を歌ふ、勇士達が幼い頃遊び疲れた山かげを私は胸に描いて見た、振武隊長甲斐少尉^(宮崎)が^(三)出撃前夜の木陰に夜更けるまで語り續けた言葉は強く私の胸を打つた

『本日^(筆者注…日本)て本當に美しい國です^(注18)ね他所から帰つて初めて日本の山の姿を見ると餘り清らかな感じがするので、泣けて泣けて仕様がないうす、生きることは難しいと思ひますが、今死んでゆくのは後に残る人達に対して何だか無責任で済まないやうな氣がします』

またこんなことも言つた『他人のためには涙を流し、自分のためには汗を流し國のためには血を流すことですね』『母の強い國は必ず強い國だと思ひます、私の母は烏澁がましい話ですが、自分から見ると実に立派な母でした、私共が皆思ふこともなく行けるのもお母さんのお陰です』かうした話を私は黙々と聞いた、甲斐少尉は未だ童顔の明るい青年だつた、後から後から振武隊の神鷲達はこの基地に到着し、一樣にこの松林を□し櫻の花をかざしてやがて出撃して行く、^(三)三角兵舎での明るい無邪氣な爆笑は、人は変るとも来る日も来る日も續くのである『鰯に命中なんていやだぜ』と皆を爆笑させた勇士も今日はもう沖繩周辺の敵艦艇に轟然と命中してゐることだらう』

③ 鹿児島日報 昭和二十年四月十五日付け朝刊 第2面 (注18)

記事見出し1…基地に仕へる制服の女學生

記事見出し2…兄さん荒鷲に贈る

記事見出し3…床し特攻機に櫻と人形

記事見出し4…櫻花を胸に出撃命令に勇むわが勇士

『古木本社特派員』基地から緑の麦畑をよぎつて、こんもりと繁つた檜や松林の中に木の葉や枝で偽装した廣い三角兵舎が此処彼処に散らばつて建つてゐる。〇〇基地特攻隊員の宿舎である『土地の人がとても親切で途中で會つても叮嚀におじぎをして、ほんたうに有難く却つて私達が恥かしい位ですよ』戦闘指令所からこの三角兵舎まで、^(ホ)わざわざ道案内して呉れた若いたくましい〇〇伍長が目を細めつゝ、戦ふ基地の人々の親切さを話して呉れる。

『この前の敵機来襲の時、附近の農家が焼けました、^(ニ)ほんたうに済まないと思つてゐましたが、今度は〇〇が燃えた時などは直ぐ駆けつけて消火に協力して呉れました。基地の人達はほんたうに親切でよく協力して呉れます、それに此処の女學生が毎日來て、特攻隊員への奉仕は至れり盡せり、打ち解け合つて兄さんに仕へるすなほな妹の様です』と女學生の眞心からの奉仕ぶりに感激を昂めて語つて呉れた。

宿舎に着くと向き合つた三角兵舎の前の空地に二十名近い制服の乙女達、炊事當番の兵隊さんの指圖を受けて特攻隊員への夕食の給仕にまめ／＼しい奉仕の最中である『毎日かうして來て下さつて助かります』と炊事の兵隊さんも指圖の一時乙女達への感謝を傳へて呉れる、兵舎に這入ると飛行服を着けた特攻隊員の人達が四、五人ほがらかな談笑の中に食事中である。

『女學生の奉仕などあなた方には却つて足手纏ひと云つた様な煩らはしさではありませんか』とぶしつけに問ふと『いや／＼どうして、とてもよく奉仕して呉れるのです、有難さで一ぱいです』

と短い中にも、はつきりと奉仕への感謝をこめる、兵舎のすみの大きな竹の筒に生けられた紫の藤の花と淡紅に染まる八重の櫻花が、三角兵舎の中に明日の出陣を祝するかの様に鮮やかに浮き出している、やさしい乙女達が手に手に持ちこんだ一枝づゝの花が器用に生けられたのである、^(ハ)學校が退けると共に毎日七、八十名づゝ、貴い奉仕に喜びの足並を揃へる〇〇高女三年生の乙女達は、やさしく強い兄さん若鷲に清く美しく仕へる妹達として基地の特攻隊員に尊い奉仕を續けてゐるのである、特攻隊員のお洗濯からシャツのつくるひまで一切を私達の手でと立派に引受けてゐるが、晴れの首途を櫻花一輪にかざしつゝ、聚らに敵を撃つ特攻隊員が櫻と共に着ける小さな可愛い人形^(ヒ)も、乙女達が兄さん荒鷲に手向ける眞心を一針々々にこめて作りあげた贈り物である、特攻隊の神鷲達は最後まで基地の女學生達の奉仕を可憐なお人形につけて征で、再び還らない故國の大地をへだて、近海にのたうつ敵艦を海底深く葬り去り、偉勲萬世に貫く陸軍特別攻撃隊の赫々の武勲を永久に残してゆくのである、神鷲達に仕へる尊さと有難さを制服の袖にはにかみつゝ、乙女達は語る。

上野とみ子さん(十七) 〇〇高女三年生、

『はじめて奉仕に参つたとき特攻隊の方々の朗かな姿に接しました、私達は、この方々が明日は櫻と散られる^(ニ)と思ふと涙を止めることが出来ず皆んな泣いたものです、でもそれはこの人達に大変すまない事であると□らず／＼教へられて來ました、^(ハ)もう泣きませんた、最後まで私達の眞心一本の奉仕が下手な慰めの言葉よりか、大きな饞けと思つて何でも手傳つて上げます、殊にお人形を作つて

差し上げると非常に喜ばれます』

馬場みつ子さん（十六）同三年生

とても痛快です、却つて私達が慰められる時もあります、出て行かれて都合で再び還つて來られた特攻隊の人と一緒に宿舍まで軍歌を歌つて行く時もあります、出発される時は櫻の一枝と首にかけける人形を喜ばれます、^{（ホ）}この戦が續く限り私達はずつと奉仕を續ける覚悟です」

三・戦後の出版物への掲載

戦後に掲載された出版物の全てをたどることは難しい。筆者が知り得た管見の限りであるが、古い年代のものを挙げておく。

（1）毎日新聞社が編集した出版物①

毎日新聞社編『毎日グラフ臨時増刊 続日本の戦歴』（一九六五年、毎日新聞社発行）に「一五年戦争の秘地帯」という特集がある。表紙の特集の見出しには、「初めて世に出る」という言葉が冠されていることから、戦後初めて出版物に掲載された写真であることが推測できる。この特集誌面に「イモ畑の平和―知覧」という見出しで六頁にわたり知覧基地の過去と現在の写真が掲載されている（図2～5）。うち三二頁から三三頁にかけて、この写真が掲載されており（図4）、キャプションには「機体の下に黒い爆弾がつるされていた 車輪をきしませながら彼らは列線を離れていった 土地の女学生が桜をふつて見送った 目には銀色の涙がふきだしていた クツのない素足にゲタをはいた女学生であった 二十年後の若者には信じてもらえない光景であつた 機上の若者は静かに敬礼して去つていった」とある。



図2 『毎日グラフ』表紙



図3 『毎日グラフ』30～31 頁



図4 『毎日グラフ』32～33 頁



図5 『毎日グラフ』34～35 頁

(2) 知覧高女が編集した出版物

知覧高女なでしこ会編『特攻基地』^(注19) (一九七九年、高城書房出版発行) には、巻頭口絵の二頁目に、この写真が掲載されている。キャプションには「出撃を見送る知覧高女三年生(知覧飛行場にて)(毎日新聞社提供)」とある。

(3) 毎日新聞社が編集した出版物②

毎日新聞社編『別冊一億人の昭和史 日本の戦史・別巻4「特別攻撃隊」』(一九七九年、毎日新聞社発行) の二四・二五頁に、「知覧基地」の項があり大きく写真が掲載されている。キャプションには「沖縄へ向けて出撃する特攻機に 桜の花を手に見送る知覧高女三年生たち この人たちは知覧高女なでしこ会編で「知覧特攻基地」を出版した」とある。

同書の六〇九頁には、複数枚の写真がはり付けられたアルバムの見開き写真が掲載されており、写真原本の保管状況が垣間見える。頁下のキャプションには、「色あせたアルバムの中には 特攻関係の二冊が残されている 毎日新聞社の従軍記者たちが残した血と汗の結晶である(六頁下)」、「軍の検閲の目は光る 戦時下から今日まで ずっと守りつづけた報道の記録 すでに逝ったカメラマンも多い(九頁下)」という説明書きが添えられている。アルバムの頁の左上には、「毎日」「寫眞部」という文字と日付が入った青スタンプが押されている。アルバムにはり付けられたそれぞれの写真の上部には、赤字で記号番号が記され、横には黒字で写真の説明と撮影者の名字、検閲済みの赤色スタンプと赤字で「掲載済」の文字が記されている。本書に掲載されたアルバムには、前掲四月十七日記事の四枚の写真のうち、記事中の写真①②④の原本がはられている。本稿で主題にしている写真の原本も、同じような状態で保管されて

いるものと思われる。

(4) 他社が編集した出版物

暁教育図書編『昭和日本史五 太平洋戦争後期』(一九七七年、暁教育図書発行) 六五頁に掲載されている。元朝日新聞従軍記者で『知覧』^(注20)の著者、高木俊朗の執筆部分「散華―特別攻撃隊」の中にある。数枚掲載されている写真の中で、この写真は本来のモノクロ写真に彩色が施されており、カラー写真のように見える。キャプションには「機上から手を振って別れを告げる特攻隊員を、土地の女学生は手に桜の花を振りながら、目にいっぱい涙を浮かべて見送った(知覧)」とある。

(5) 毎日新聞社が編集した出版物③

毎日新聞社編『決定版 昭和史』第十二巻(一九八三年、毎日新聞社発行) 四四・四五頁に、「特別攻撃隊〈昭和二十年〉必死必中を期して」という項があり二頁にわたってこの写真が掲載されている。キャプションには「散る桜 残る桜も 散る桜」ある特攻隊員が詠んだ句である 沖縄戦がし烈になると 九州の陸海軍航空基地から 若桜が還らざる攻撃に次々と飛び立っていった 知覧基地で女学生に見送られて出撃する一式戦闘機」とある。

(6) 参考 機上の特攻隊員に言及したもの

水口文乃著『知覧からの手紙』(二〇〇七年、新潮社発行) は、特攻戦死した穴澤大尉とその婚約者だった伊達智恵子さんの物語をまとめたものである。巻頭に掲載されたこの写真のキャプションに「昭和二十年四月十二日知覧の飛行場にて。女学生に見送られながら飛び立つ利夫さん」とある。この写真に写る機上の特攻隊員が穴

澤大尉であったことは、「特攻日記」により従来からいわれていたが、掲載写真の説明文で言及したものとしては、筆者が確認できた中では初出文献になると思われる。

五．考察

(1) 新聞記事の記述に関する考察

波線部(ア) 基地名は伏せられているが、陸軍特別攻撃隊基地が置かれた知覧基地(陸軍知覧飛行場)において取材されたものであると思われ、末尾の記載から四枚の掲載写真は毎日新聞記者の早川報道班員が撮影したものであることがわかる。

波線部(イ) 寺師姓は知覧町郡地区にみられる姓である。

波線部(ウ) 知覧特攻平和会館が把握している隊員情報では、「オ」姓で福島師範卒の陸軍特攻隊員戦没者の記録はない。最も可能性が高いと思われるのが、知覧基地を経由して四月七日に喜界島から出撃した福島県出身の小山大尉(当時少尉)である。小山大尉は特別操縦見習士官で学徒出身であるが、出身校が不明である。福島師範学校を前身に持つ福島大学の総務課に問合せたが、当時の資料等が残っておらず確認することはできなかった。

波線部(エ) 本文に添えられた写真③は、知覧高等女学校生徒であることは、彼女らの証言により明らかである。

波線部(オ) 知覧基地では、特攻隊員らが出撃までの数日間を寝泊まりした三角兵舎群は、戦闘指揮所付近から約1kmほど離れた松林の中にあった。

波線部(カ) 手帳は不明であるが、四月十二日に特攻戦死した岸誠一大尉が、この辞世を残している。

波線部(キ) 特攻機には、それぞれ「機付き」と呼ばれる担当の整備兵がいた。整備兵の氏名は不明である。

波線部(ク) 写真説明には女子整備員とあるが、知覧高女生徒が昭和二十(一九四五)年三月二十七日から四月十八日までの二十三日間に従事していたのは、三角兵舎における洗濯や縫物、兵舎の清掃などである。飛行機の擬装を取る手伝いをしたことは日記の記述により明らかではあるが、整備に従事したという話は聞かない。写真③の上衣はセーラー服であるのに対し写真②は和服である。写真②は女学生ではなく、飛行場で働く軍属の女性であった可能性もある。

波線部(ケ) 知覧基地には戦闘指揮所に近接して、特攻機からの無線を受けるための半地下式の通信施設があった。

波線部(コ) 知覧高女の女学生が、三角兵舎内で菜の花・椿を空き瓶に生けて飾っていたことがわかる。

波線部(サ) 「特攻日記」を記した前田笙子さんである。

波線部(シ) 第三十振武隊員。「特攻日記」の三月三十一日、四月一日、二日に登場する。

波線部(ス) 第三十振武隊員。「特攻日記」の三月三十一日に登場する。

波線部(セ) 「特攻日記」の三月三十一日に登場する。

波線部(ソ) 「特攻日記」の四月二日に登場する。

波線部(タ) 「特攻日記」にも記述がある。

波線部(チ・ツ) この記事が取材されたと推測できる四月一日前後から、出撃する特攻隊員に桜の枝を隊員に手渡し

波線部(テ) 第三十振武隊員。「特攻日記」の四月三日に登場する。
等女学校の近くの花井手公園に隣接する恵比寿神社または、知覧市街地から知覧飛行場へ向かう途中に位置する豊玉姫神社のいずれかと推測される。

波線部(ト) 江戸時代の僧、良寛の和歌「散る桜、残る桜も散る桜」を本歌取りした辞世である。特攻を桜が散ることになぞらえて、用いられていたようである。

波線部(ナ) 四月九日付け記事では、兵舎内に生けてあったのは「菜の花や椿」とあったが、この十二日付け記事では桜が生けられ、胸ポケットにかざしていることが報道されており、満開の時期に取材されたとみられる。

波線部(ニ) 第四十四振武隊長、甲斐玉樹大尉(戦死後の階級)。「特攻日記」に記載はない。四月一―二日に知覧に滞在し七日に徳之島から出撃している^(注21)。

波線部(ヌ) 桜の花と出撃がセットで報道されている。

波線部(ネ) 知覧飛行場の戦闘指揮所から三角兵舎までは、約1kmの道のりである。

波線部(ノ) 当時、知覧町役場庶務課長の三宅直矢の日記によれば、三月二十九日の八時四十分、九時十五分、十五時四十分上空襲があり、上別府地区(戦闘指揮所周辺の集落)に家屋の焼失五戸、半焼三戸との記録がある(知覧町郷土誌編さん委員会編『知覧町郷土誌』二〇〇二年、知覧町 一〇三六頁)。

波線部(ハ) 四月十五日付け記事になると竹の筒に藤の花と八重

表1 三角兵舎内での花に関する記述

三角兵舎内での花に関する記述	記事
「空瓶を利用して菜の花や椿が無造作に活けてある」	鹿兒島日報 4月9日記事
「誰の枕辺にも一枝の満開の櫻が活けられ」	鹿兒島日報 4月12日記事
「竹の筒に生けられた紫の藤の花と淡紅に染まる八重の櫻花」「手に手に持ち込んだ一枝づゝの花」	鹿兒島日報 4月15日記事
「八重桜、山吹、木蓮、つつじ、れんげ草、色とりどりの花を摘んで来ては部屋一ぱいに飾り」	毎日新聞 4月17日記事 「花と特攻隊」の項

波線部(ヒ) 女学生らは、桜とマスコット人形を贈っていたことが伝えられている。
波線部(フ) 特攻戦死を、桜が散るという言葉で表すことが一般的に行われていたようである。
波線部(ヘ) 涙を見せることを禁じたというよりは、人情的なものであったと思われる。

波線部(ホ) 首にかける人形は、いわゆるマスコット人形のことであろう。この時期、知覧高女の女学生らは出撃の見送りにあたり桜の枝とマスコット人形を隊員に渡していたことがわかる。

ここに紹介した毎日新聞記事と鹿兒島日報記事から、女学生らは三角兵舎内にさまざまな花を摘んできて飾っていたことがうかがえる(表1)。それは必ずしも桜というわけではなく、その時に咲いていた彼女らの身近にあった花を持ち込んでいたようである。折しも、四月上旬は桜の満開の季節であったことから、見送り時に桜の枝を手渡

すようになった。それは、特攻隊員の死を桜の花が散るといふ現象になぞらえていた当時の風潮、また当時の国民感情から考えても、多感な年頃の彼女らが自発的に行うようになったものと思われる。四月十二日前後の頃には、三角兵舎内には、室内に飾るための「色とりどりの花」や、見送り時に手渡すための桜の枝が毎日のように持参されていたのであろう。

ちなみに、高木俊郎著『知覧』にも桜の花の記述がある。

「特攻機の操縦席のふちには、花輪のように、桜の花が飾ってあった。また席のなかにも、らんまん咲いた八重桜や山桜の枝が入れてあった。当時の知覧高等女学校の奉仕隊の女学生のことであつた。(中略)生徒たちは、その残りの枝を持って、特攻機の離陸して行く時に、高く激しくふった。その花びらが、雪のように、乱れ散った。(同書八頁)」

「前田笙子は、豊玉姫神社の、みたらし園の、桜の木にのぼって、花ざかりの枝を折っていた。通りかかった男が、しかった。「桜ん枝を折っちゃいかん。おなごん子が木のほりをすつとは、ないごつか」笙子は、桜の花で、特攻隊の三角兵舎を飾り、特攻機の操縦席にいれるつもりであつた。そのことを話すと、「それならばよか。ずばつ(たくさん)持っていきつしやれ」と、今度は、励まして去つた。(同書三六四頁)」

知覧基地における朝日新聞の従軍記者であつた高木が、綿密な取材をもとに、三角兵舎や操縦席に桜の枝を飾ったことと、豊玉姫神社のみたらし園(神社北東側の道路に面した場所)にあつた桜の木(現在はない)から枝を折ってきたエピソードを伝えている。だが、残りの枝を持って高く激しくふったという表現は少し違和感を感じ、女学生らがこのような見送りを度々行っていたかのような錯覚を覚えてしまう。しかし、当時の新聞記事にはそのような描写はな

く、一枚の写真が掲載されただけであり、永崎(旧姓・前田)笙子さんは、「このような形で見送つたのはこの日だけです。」と証言している(注22)。

ところで、初出の昭和二十(一九四五)年四月十七日毎日新聞大阪本社版の記事全体からみると、この写真は大きく扱われてはいなかったことがわかる。メインは、特攻隊員が畑仕事を手伝った話である。末尾の写真説明に、「櫻花を手に振武隊出撃送る女子整備員」とあるものの、記事本文に写真の場面はない。「花と特攻隊」の項に書かれている話題は、女学生らが花を兵舎内に飾っていることと、花が散ることに特攻戦死することをなぞらえた辞世の句の話である。

(2) 戦後の出版物に関する考察

昭和四十(一九六五)年十一月発行の『毎日グラフ臨時増刊』における掲載が、戦後の出版物における初出文献であるとすれば、この時に写真が大きく扱われたことで、その後の出版物にも影響したと考えられる。戦後二十年が経過したこの年の九月には、高木俊郎著『知覧』の初版が発行されている。『知覧』は、昭和三十九(一九六四)年十一月から翌年七月まで『週刊朝日』に連載されたもので、知覧高女らも実名で登場する。『知覧』は、特攻基地としての知覧の名が全国に広く知れ渡る一つのきっかけとなった。戦後二十年が経過し、社会経済が安定してきた社会情勢の中、戦争を振り返る出版物を通して、知覧における特攻隊と「なでしこ隊」と呼ばれた女学生らのエピソードとともに、この写真が広く認知されるようになっていったと考えられる。その後も、「なでしこ隊」は度々メディアに取り上げられてきたが、その度にこの写真が使われ、穴澤利夫大尉とその婚約者だった人のエピソードが有名になっていくと、この写

真に写る特攻機のパイロットが穴澤大尉であると推定されたことから、さらに露出の機会も増えていくことになった。

以上をまとめると、戦後二十年の節目の年に、高木俊郎の『知覧』の出版と時を同じくして出版された毎日新聞の出版物に大きく掲載されたことを契機に知られるようになり、その後も様々な出版物に掲載されるようになった。その後、「なでしこ隊」や穴澤大尉のエピソードが知られるようになり、さらに出版物やテレビなどのメディアに繰り返し用いられてきたことで、この写真が特攻隊を見送る象徴的な写真として広く知られるようになっていった過程をたどることができる。

近年では、モノクロ写真をAI技術を用いてカラー化する試みの中でも取り上げられている。庭田杏珠・渡邊英徳著『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』（二〇二〇年、光文社発行）には、カラー化したこの写真を掲載している。キャプションには、「一九四五年四月十二日 知覧飛行場にて。特攻に向かう穴澤利夫少尉の「隼」を見送る知覧高等女学校の生徒たち。」とある。

ここに挙げた以外にも、テレビ放映も含め、掲載・報道された機会は他にも多くあったと思われる。現在では、特攻見送りの象徴として、穴澤大尉を見送る知覧高女の写真という認識が定着している。

（3）日記と証言の裏付けに関する考察

① 知覧高女なでしこ会の座談会

平成三十（二〇一八）年十二月二十一日、知覧在住の知覧高女なでしこ会（以下、なでしこ会）の方々が参集し知覧特攻平和会館講話室にて座談会が行われた。なでしこ会は、当時の知覧高女三年生が昭和二十六（一九五一）年十月に結成した会である。この日の出席者は、特攻隊員担当だった栢川ムツ子さん・前田（旧姓・森）要

子さん・松元（旧姓・清藤）良子さん、飛行戦隊担当だった桑代（旧姓・塗木）チノさん・田中（旧姓・永崎）サツさん・門園（旧姓・栢原）ツヤさん。その場には、知覧特攻平和会館の朝隈館長、瀬戸口係長、八巻学芸員、語り部の川床・村永・田代・和田・桑代の各氏及び筆者が同席した。以下、桜の枝を振って見送った時の様子について語られた部分を抜粋する。

聞き手・八巻「桜の話なんですけど、穴澤さんが出て行く時に皆さん桜の枝を振っていますよね。桜で特攻隊員を見送るということは何回かされたのでしょうか。一回だけだったのでしょうか。」

桑代チノさん「一回だけだったかな。」

前田要子さん「何回かあったよ。一回じゃなかったよね。」

聞き手・八巻「前田さんのご記憶では何回か。門園さんのご記憶では？」

門園ツヤさん「はい、何回か行ったことはあります。」

聞き手・八巻「栢川さんのご記憶はどうでしょうか。」

栢川ムツ子さん「もう私なんかは行かない。」

聞き手・八巻「遠いでもんね。じゃあ栢川さんは桜を持って見送ったことはなかったと。」

栢川ムツ子さん「私は写真だけ。見たことはないです。」

田中サツさん「戦闘指揮所ってあるでしょ？あそこで隊員を並べて、今出撃する人に盃で交して、マフラーを巻いて、飛行機に乗っているのを私達は見送りました。」

栢川ムツ子さん「さっちゃんは、桜の写真に載ってるの？送る所の写真に？」

桑代チノさん「いや違うよ。」

門園ツヤさん「あれはね上別府の人達が多いの。」

聞き手・八巻「この写真ですね。」

門園ツヤさん「新聞社が写真を撮ったので。屋根の上に乗って。」

桑代チノさん「慰霊祭を帰った後、笙子さんが名前を付けたはず。私もコピーをもらっているけどね。」

聞き手・田代「その桜の写真を見ますと、ソメイヨシノでなくて八重桜ではないのかなと感じがするのですが。」

前田要子さん「山桜・・・。」

聞き手・田代「いや、山桜が一番早いです。その次がソメイヨシノ。その後に八重なんです。」

桑代チノさん「山桜ではなかったよ、八重桜だったよ。」

前田要子さん「これ八重桜でしょ？」

聞き手・田代「でしょ？役場にあるのは山桜なんですよ、一番早いのは。だからその後に普通のソメイヨシノが咲いて、四月十二日頃はもう八重桜ではないのかな。そうでしょ？」

前田要子さん「はい。私は覚えているもの。」

聞き手・和田「あれは誰かがまとめて取りに行ったのですか？」

それとも皆で。」

前田要子さん「皆で勝手に取って。」

聞き手・村永「橋の袂で言ってるけど、橋の袂で取ったのでしょ？」

聞き手・和田「同じ場所ばかりですか？」

前田要子さん「いや、違う。八重桜とか、色々ありますよ。」

聞き手・和田「永崎さんの日記には神社にも取りに行ったというのが出てくるのですが。」

前田要子さん「だからね、あっちもこっちも咲いた所に行って取ったんです。」

聞き手・和田「一回だけじゃないですもんね。」

聞き手・八巻「あと、桜は軍から言われて持って行ったのですか、それとも自分達で。」

前田要子さん「自分達で。」

聞き手・八巻「自分達でそうした方が良さなあとと思って、桜の枝を持って行っていったのですか。」

門園ツヤさん「誰かが取って来て持たせて。」

聞き手・川床「桜の件で言うと、操縦席を桜で埋めたとか、飾り付けをしたとかいう話も出てくるのですが、そういうのはなかったのですか？」

門園ツヤさん「操縦席まではしてない。よっぽど沢山渡さないと、そんなしないね。」

聞き手・田代「それから特攻隊員が操縦席に乗った時に、女学生の方が花を持って行ってやったというのも書いてあるのですけど。」

聞き手・村永「そういう桜のことについての本がたくさん出るから、だから聞くのです。」

門園ツヤさん「操縦席まではしてない。よっぽど沢山渡さないと、そんなしないね。」

聞き手・八巻「桜の枝は自発的に持って行ったのですか、それとも軍からの指示があつて？」

桑代チノさん「自発的。笙ちゃんが持って来たから。」

聞き手・八巻「役場の横の？」

田中サツさん「昔は警察があつて、あそこの土手に一番先に咲く山桜があるの。」

聞き手・八巻「誰が、どの方が持つて来たのですか。知覧の桜は軍から言われたのではなくて、自分達で？」

桑代チノさん「笙ちゃんを持つて来たの。そう言っただから。笙ちゃんが大きなナタか鎌を持つて来て、叱られたって言っただから。」

栢川ムツ子さん「そして小枝に分けたんだよね。」

聞き手・八巻「永崎さんのお話では御自宅に塩釜桜というのがあって、そこから持つて来たというお話を。」

桑代チノさん「違う、あの川べりの。こんな大きなのを紐で結んで持つて来たって。だけど切った後は叱られたって。」

聞き手・川床「チノさん、こういった見送りは何回もやったわけですか？」

桑代チノさん「何回もありました。部屋の掃除をするうちに、見送りとなったら下駄を履いてすぐ兵舎を出て走って行っていました。」

聞き手・川床「場所も、上から指定をされて、ここに並べるとか言われて・・・。」

桑代チノさん「そうです。」

聞き手・川床「こんな風に並んだのは何回もあったのですね。」
桑代チノさん「何回もあったの。初めは何回か昼に出ていたけど、これは夜明けだったの。一番印象に残っているのは、飛行場から1kmぐらいの所に特攻隊の所に行けない退避、一晩中エンジンを掛けて整備をするのが1kmぐらい離れていても聞えるの。夜明けになるとそれが飛び立つの。」

聞き手・田代「それと、見送る時に皆さん穴澤さんを見てなく

て、横を向いたり下を向いたりされてますけど、あれは当時は涙が出るからまともに見れなかったとか、上官から見送る時には絶対に涙を見せるなと、そういったことは。」

前田要子さん「ありません。」

聞き手・田代「じゃあどうして見送ってる方を見ていないのですか。」

前田要子さん「わからない。涙が出るから。」

聞き手・田代「皆さん、横や正面を見ていないですよ。」

前田要子さん「下を向いてるでしょ？まともに見れるものじゃないですよ。」

聞き手・村永「涙を見せるなどか命令はなかったのですか。」

前田要子さん「それは何もなかったですけどね。もう、これが出れば必ず死ぬってことがわかってるでしょう。だから皆、本当に涙が出るのよ。本当に可哀想でしたよ。」

桑代チノさん「今までもずっと印象に残っている。子ども心にね、十四、十五歳の子どもが悲しい思いをしなればならない時代に生まれたなと思っていますよ。」

(平成三十年十二月二十一日 知覧高女座談会より)

見送りをした回数は、桑代チノさんは一回、前田要子さんと門園ツヤさんは何回かと答えているが、桜の枝を振って見送ったことは一回であり、見送りそのものは何回かあったことを示しているようである。

桜の種類についての会話は、彼女たちが三角兵舎に奉仕に行った

表2 「特攻日記」に記載されている桜の記述

3月30日	朝早く神社の桜花をいたゞいて最後のお別れとして私達のマスコット人形とを差上げる
4月12日	桜花にうづまった飛行機が通りすぎる。／＼一生懸命お別れのさくら花を振るとにっこり笑った。
4月16日	散りかけた八重桜を差上げると大へんよろこばれた。

表3 知覧高女が三角兵舎に持ち寄っていた桜の推定採取地

山 桜	花井手公園（座談会より） 現在の知覧図書館の場所。麓川沿いの土手には現在でも桜の木が残っている。現在の南九州市役所西側駐車場の場所には、当時、知覧警察署があった。
ソメイヨシノ	花井手公園または豊玉姫神社裏のみたらし園（みたらし園は、豊玉姫神社裏の道路沿いにあった公園で桜の木が植栽されていた。現在は一部埋没。高木俊郎『知覧』にみたらし園で桜を枝を折った記述がある。）
八重桜	永崎（前田）祥子さんの自宅（本人の証言より） 自宅は花井手公園の対岸にある大心寺の門前にあった。

三月二十七日から四月十八日までの二十三日間のどの段階のことを話しているのかが錯綜していると感じられるが、「八重桜とか、色々ありますよ」「あつちこつちも咲いた所に行つて取つた」という証言から、山桜・ソメイヨシノ・八重桜と開花時期の異なる桜を扱っていたことが裏付けられた。「特攻日記」にある桜の記述（表2）では、四月十六日のみ八重桜と種類が書き分けられている。四月十二日の見送りの際に手に持っていた桜は八重桜であり、永崎（旧姓・前田）笙子さんがその日の朝に自宅から持参したものであったことは本人が証言している（注25）。これらを踏まえると、知覧高女の女学生らが三角兵舎に持ち寄っていた桜の種類と取ってきた場所を、表3のように推定することができる。

見送りは、彼女たちの記憶の中では軍から指示されたものではなく、自発的に行っていたそうであり、何回もやっていたかとの問いに、「部屋の掃除をするうちに、見送りとなつたら下駄を履いてすぐ兵舎を出て走って行つてました」と答えている。見送る場所については、指定された場所に並んだようである。

時間帯については、「夜明けだった」と話しているが、四月十二日の出撃は、後述するように昼であったことが記録にあることから、別な見送りの日の記憶であると考えられる。

また、これは以前からも指摘されていることではあるが、写真の中で女学生らが横や下を向いているのは、これから出撃する特攻隊員を思う悲しみから注視することができなかったことが回想されている。これについては、次に紹介する桑代チノさんからの証言がある。

②元女学生、桑代（旧姓・塗木）チノさんの証言

平成三十一（二〇一九）年四月から当館の語り部を務めている桑代照明氏が、元女学生である母、桑代（旧姓・塗木）チノさんから特攻隊を見送る場面について令和元（二〇一九）年五月十五日に聞いた話である。チノさんは当時、飛行戦隊を担当していたが、見送りには特攻隊の担当、飛行戦隊の担当の両者とも並んだようである。彼女は、この写真が撮影された時には、写真枠外の左側に並んでいたという。この証言は、何気ない親子の会話の中でこの写真が話題になったことから、桑代氏が思わずスマートフォンで録画したものである。以下、桑代氏から提供していただいた会話の要旨をここに紹介させていただく。便宜的に桑代氏を「息子」、チノさんを「母」と表記した。

聞き手・息子「民間の人は普通は入れない場所なんだ。」

語り手・母「入る・・・最初は入ったような話も聞いたけど、はつきりはわからない。笙子さんなら分かるのだけだね。私達があそこに並んで見送るあの時期は、女学生と端っこに整備兵とか色んな手伝いをする人なんかが見送っただけ。」

聞き手・息子「見送りの場所に整列する時は、先生か誰かが入るのですか？」

語り手・母「いやー。下がってと言う、誰か指示をしたかも、危ないから。羽根があるから。十何m、お椀くらの顔が見えるくらいの近さだったの。」

聞き手・息子「あの写真は近くに見えるよね。」

語り手・母「まあ、近くと言っても、羽根があるから危険じゃない距離があるわけ。」

聞き手・息子「距離的にはどれくらい？」

語り手・母「距離どころではないから、見送るから。とにかく羽根があるから。それから二、三mは下がっていたと思う。」

聞き手・息子「穴澤さんを見送るあの写真はみんな下を向いたり横を向いたりしているけど、何でだろうね。」

語り手・母「悲しいから、まともに見れないの。何時間もしない内に、一時間か一時間半もしたら突っ込む、もう帰らない人だと、神様だと手を合せていたの。神様だから。神様に見えたから。まともに見れなかった。私なんかは、まともに見送ったと思っていたら、後から何十年も経ってから氣付いたの。」

聞き手・息子「あの写真を？」

語り手・母「(中略) 富屋の入口に、なでしこ部隊の人が送るのがあるでしょ？あれを見て、それも取材が来て気付いた。「見てごらん。下を向いている。」と、その時に気付いたの。」

聞き手・息子「それいつ頃だろう。」

語り手・母「いつ頃かな。わからないけど。ようこさんと私は確実にあったはずだと思う。」

(中略)

聞き手・息子「終戦後どれくらい経ってからでしょうかね。」

語り手・母「どのくらいかなー。すぐく年数が経っていったね。」

聞き手・息子「まだ嫁さんには行ってなかった？」

語り手・母「まだ。」

聞き手・息子「まだ女学生というか、二十歳前くらい？」

語り手・母「十七、八歳で卒業したから。平和会館なんかが騒動するようになってから気付いたんだから。そんなあんなの秘密で頼んだり、どうしたりお願いなんかして出来るものではないですよ。」

聞き手・息子「だよね。誰かが頼んでそういう風に仕掛けたというでもないよね？」

語り手・母「絶対。太鼓判を押す。知らない人が言うことだ。怒りたい。」

聞き手・息子「ある人に言わせれば、あれはヤラセだったという話なんだけど。」

語り手・母「どうしてヤラセができるの、あの時代に。」

聞き手・息子「あの時代にそうだよ。」

語り手・母 「もう怒りたいよ。命からがらの人達、命を国の為に戦いに行く人なんか、そんな、「写真撮れ。」どうこうって。」

聞き手・息子 「普段から、ああいう形で女学生たちは写真を撮られてたのかな。」

語り手・母 「あれが、一枚じゃないの。見送るのは。」

(令和元年五月十五日 桑代親子の会話より)

さて、親子の会話でも、悲しくてまともに見られなかったという証言がある。ただし、戦後に受けた取材の中で指摘され初めて気がついたという。あらためて写真を見てみると、完全に下を向いているのは左から三人目の方だけである。その右側の三人が横を向いているように見えるのは、出発線に向かって地上を進む先発した飛行機を見送っているようにも見て取れる。まともに見ることができなかったという胸中は当然あったであろうと察するに余りあるが、全員が下を向いている様相は写真情報からは読み取ることではできない。戦後にマスコミ等の取材を受けていく過程で、その解釈が強調されるようになったと考えられる。

(4) 撮影現場に関する考察

特攻隊員を見送った場所が戦闘指揮所付近であったことは、元女学生らからの伝聞等により以前から知られていた。今回、撮影ポイントをより絞り込むために、知覧特攻平和会館職員数名で現地調査を行った。詳細な位置関係を検証する手がかりは、写真の奥に写る山裾である。傾斜角度から、知覧飛行場の西側にある丘陵、猿山の右側裾の稜線だと考えられる(図6-1a)。また、女学生らの足下の地面に着目すると、雑草が生えているようにも見え、他の部分の地

面とは見た目が異なっている。女学生ら民間人は敷地外側から見送ったとも推測できることから、飛行場敷地との境界にあった道路部分に立っていたと考えられる(図6-1b)。

二つの手がかりから、特攻隊を見送った場所を推定した(図7-8)。次にカメラアングルを検討する。女学生らよりやや高い位置から撮影されているのはなぜなのか。実は、飛行場敷地の境界には、側溝と幅約二mの道があったという地元住民の証言がある^{注24}。

現に、女学生らの目の前には段が見え、それは平坦な地面ではなく掘り込まれた溝の壁であると推測できる(図6-1c)。土手の壁面部分を観察すると、表層の下に十数cmほどの、この地域特有のコラ層と呼ばれる地層があるように見て取れる。現在この場所には、東西方向の道路があつて耕作地との間に排水路が設けられている。排水路は、当時の溝の壁を利用して設置された可能性がある(図9)。以上より、女学生らは溝状になった道路の下に並び、カメラマンはその外側の道路の上から撮影した情景が浮かび上がる。女学生らと特攻機との距離は、現場の状況から十〜二十mほどであったと推察する(図6-1d)。

ここで、あらためて撮影された現場の状況を、飛行場全体での位置関係から整理しておきたい(図10・11)。戦闘指揮所を基点にすると、知覧高女の女学生らが桜の枝を取りに往復した三角兵舎群は、南側に約1kmの距離にあった。見送りを受けた飛行機が地上滑走にて移動する出発線は、東側に約1km離れた場所にあった。このような位置関係の中、特定した撮影場所は、戦闘指揮所から西側へ約100mの位置で、南側から北西方向を向いて撮影された。

ちなみに、生田惇著『陸軍航空特別攻撃隊史』(一九七七年、ビジネス社発行)によれば、四月十二日に知覧から出撃し特攻戦死した部隊の隊員名と出撃時刻は表4のとおりである。正確な時間の詳

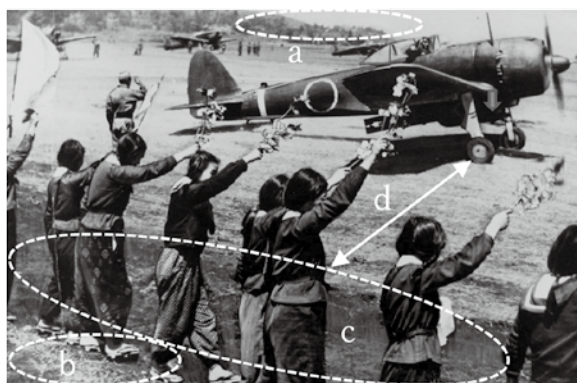


図6 撮影場所の絞り込み作業①



図7 撮影場所の絞り込み作業②



図8 特定した撮影場所



図9 西側からみた撮影場所



図10 見送り場所の位置関係図 (Google earth より付加作成)



図11 見送り場所の位置関係（猿山頂上から撮影）

表4 昭和20年4月12日に出撃した特攻隊員一覧（生田1977より作成）

部隊名	出撃時刻	隊員名（階級は出撃時）	使用機種
第103振武隊	12:00	石切山文一少尉・源善正少尉・板倉震少尉・渡辺三郎軍曹・青木英俊伍長・内田新一伍長・滝沢泉三伍長・長家利左エ門伍長・宗平誠三伍長・矢島嚙矢伍長・城所一郎伍長	99式襲撃機
第69振武隊	12:00	池田亨少尉・岡安明少尉・柳生諭少尉・持木恒二少尉	97式戦闘機
第20振武隊	12:00	穴澤利夫少尉・大平誠志少尉・寺沢畿一軍曹	1式戦闘機「隼」
第43振武隊	12:20	岸誠一少尉・大野宗明少尉・前田敏少尉	1式戦闘機「隼」

細な記録は不明であるが、記録上は同じ十二時に記録されている第六十九振武隊の後に第二十振武隊が出撃したことは、日記と証言からわかっている。第一〇三振武隊との順序関係は不明ながら、それよりも前に出撃していたのではないかと推察する。

写真を見ると、後方には三機の飛行機が間隔を開けて並んでおり、整備兵が出撃前の最後の整備を行っているように見える。後方の飛行機は、その形状から、写真中央の飛行機同様に一式戦闘機「隼」であると思われる。出撃時刻が十二時に記録されている部隊のうち、一式戦闘機「隼」を使用したのは第二十振武隊だけである。九九式襲撃機を使用した第百三振武隊ではない。第六十九振武隊は、第二十振武隊の前に出発していることが日記からわかっている。このことから、写真中央の飛行機は第二十振武隊、後方の三機は、十二時二十分に出撃記録のある第四十三振武隊であることが明らかである。

ただし、写真情報からは、第二十振武隊の三名のうちの誰であるかを特定することは困難である。これまで、「特攻日記」における情景描写を根拠に、穴澤大尉であるといわれてきている。今後その解釈が変わることはないが、将来、尾翼マークの判別や顔認証など写真情報をより詳細に解析する技術が進めば、補完できる材料が見つかるかもしれない。

まとめ

当時を知る世代の人々にとっては何気ない当たり前のことでも、言葉を活字にして記録に残しておかなければ後世の人々は異なる解釈をしてしまう恐れがある。本稿では、知覧特攻平和会館の戦史資料室展示のリニューアルを機に、桜の枝を手に持ち特攻隊を見送っ

た女学生の写真について、事実関係の確認を目指した。その結果、次のことを確認することができた。

- ・この見送りの時に手にしていた桜の枝は、三角兵舎内に生けたり、出撃する特攻隊員へ手渡すために用意されていたものであった。
- ・当時の新聞には、桜の枝を手に見送ったことは記事本文では取り上げられておらず、掲載写真のキャプションで説明された。
- ・戦後二十年の年に発行された出版物に写真が掲載されて以降、度々用いられてきたことで認知度が高まりイメージが定着していった。

- ・日記と日記を書いた女学生（故人）の証言に対して、その場にいた他の女学生らの証言からも、それを補完することができる。
- ・女学生らは、戦闘指揮所から西へ約100mの位置の溝内に並び、カメラマンは溝の外側から撮影したと推測する。

- ・写真の後方には、第二十振武隊の後に出撃を控えた第四十三振武隊の飛行機が出撃前の整備をしている様子が写っている。

繰り返しになるが、女学生らの見送りは複数回行われていたが、桜の枝を手にとって見送ったのはこれが最初で最後のことであった。本来は手渡すはずであったものの、それが間に合わずに手に持っていて見送ったのであり、始めから意図したものではなかった。偶発的に起きた出来事を、毎日新聞の特派員がその瞬間をカメラに収めたものであった。

この写真は、特攻隊員を見送った一場面を、客観的に後世に伝える役目を負っている。写真を読み解くには、枠内のみならず枠外の状態も考える必要がある。桜の枝がその場にあることの、背景を考えるのも重要だ。空間軸と時間軸の幅を広げて想像力を傾けることで、歴史の真実により近付くことができる。

戦後七十五年が経過したこんにち、鬼籍に入られる方も多くなり、その場にいた人たちと時間を共有できるのは最後の機会となる日が近付いている。今回、一枚の写真から知覧の現場で実際に起きた出来事について、当事者の声とともに多角的な視点からアプローチすることができた。

無論、人の記憶は全てが正確であるとは限らない^{〔注25〕}。加えて、現在の中学三年生に相当する年齢だった彼女らと、将兵・報道陣らとは情報レベルに差があったことも否定できない。それでも、やはり当事者が語る言葉は重い。知覧高女の証言は、写真、日記、毎日新聞・鹿児島日報記事と複合的に補完し合うことでオーラルヒストリーとしての資料的価値を有している。課題として、当時その現場にいた女学生以外の方々からの証言や、新聞社に残る記録などがあれば比較検証することが可能であろうが、今回は至らなかった。

知覧特攻平和会館では、今後もこの写真にまつわる事実を正しく伝えていく努力を続けていく。この写真は、日記や新聞（文字資料）、体験者の証言（口述資料）とともに一場面を複数の記録から迫ることができ、知覧における特攻の史実を語る上で欠かせない、極めて重要な歴史資料である。

本稿に至るまで、知覧高女などしこ会の皆様をはじめ、毎日新聞社、南日本新聞社など御協力いただいた皆様に、心から感謝申し上げます。また、本稿の骨子は、かねてからの同僚学芸員・語り部らとの議論を元にまとめたものであることを付記しておきます。

【注】

注1 村永薫編『知覧特別攻撃隊』ジャブラン、一九八九年の背表紙

注2 南日本新聞社編『特攻この地より』南日本新聞開発センター、二〇一六年の表紙

注3 伊藤隆・川上和久ほか『新しい日本の歴史』育鵬社、二〇二〇年、二四五頁。本

文「沖縄では、はげしい地上戦がくり広げられ、日本軍は沖縄県民とともに必死の防戦を展開し、航空機による体当たり攻撃（特攻）や戦艦大和による水上特攻も行われました。」の挿図として、この写真が掲載されている。写真の説明文は「特攻隊 鹿児島県の知覧基地を飛び立つ特攻機の隊員を、地元の女学生が桜の枝を振って見送っているところ。」とある。

注4 毎日フォトバンク <https://photobankmainichi.co.jp/>

注5 毎日新聞社知的財産ビジネス本部長、大久保資宏氏らの御教示による。

注6 南九州市指定文化財。高木俊郎著『知覧』（後、改題『特攻基地 知覧』一九六五年、一七〇二九頁）や知覧高女なでしこ会編『特攻基地』（後、改題『群青 知覧特攻基地より』一九七九年、一二八―一四四頁）、知覧町郷土誌さん委員会編『知覧町郷土誌』一九八二年、九七五―九八三頁）、及び注7文献に採録されている。

注7 八巻聡「女学生が綴った「特攻日記」の基礎的研究」『知覧特攻平和会館紀要』第一号、知覧特攻平和会館二〇一九年、七一（四二）―七〇（四三）頁

注8 前掲7 五七（五六）―五六（五七）頁

注9 知覧特攻平和会館では特攻隊員の敬称として特攻戦死後に特進した階級を用いている。

注10 貞廣真紀「写真をアダプトするリフォトグラフィーとしての南北戦争写真」『言語文化』第三十六号 明治学院大学言語文化研究所、二〇一九年、一六六―一八七頁 / 北本朝展二〇二〇「メモリーグラフ…景観の時間変化をアーカイブする新しい写真術」『デジタルアーカイブ学会誌』第四号 一二四―一二七頁

注11 文末に記事掲載

注12 鹿児島日報社は、昭和十七（一九四二）年に鹿児島新聞社と鹿児島朝日新聞社が合併して誕生した鹿児島県を中心とする地元紙で、昭和二十一（一九四五）年から南日本新聞社に社名変更した。

注13 知覧高女なでしこ会「会員名簿」一九九八年

注14 前掲7 五一（六二）頁

注15 前掲13

注16 文末に記事掲載

注17 文末に記事掲載

注18 文末に記事掲載

注19 後に『群青 知覧特攻基地より』に改題

注20 後に『特攻基地知覧』に改題

注21 加藤拓『陸軍航空特別攻撃隊各部隊総覧 第一巻突入部隊』二〇一八年 一七〇頁

注22 前掲7 五七（五六）頁

注23 前掲7 五六（五七）頁

注24 知覧飛行場西側の上別府地区で育った峯苦真雄氏によれば、「飛行場の脇に側溝があつてその横にバラスが敷いてある幅二mぐらいの道がありましたのでそこを歩いて見に行つたわけです。砂利道の側面は土手のようになっていて外側は畑や山になっていました。」とある。（大山勇作・八巻聡「知覧飛行場跡境界の調査」『ミュージアム知覧紀要・館報』第一五号、ミュージアム知覧二〇一八年、二二頁）

注25 聞き取り調査は、歴史学ではオーラルヒストリーと呼ばれ現代史を研究する上で文字資料と付き合わされて初めて確認される」と捉えられている。記憶は「他の史資料と付き合わされて初めて確認される」と捉えられている。記憶は、同じ体験でも人によって異なることや再解釈される場合があること、語られる社会的文脈や、聞き手との関係性によって導き出される記憶が異なる可能性があることが認識されている（蘭信三「オーラルヒストリーの展開と課題歴史学と社会学の狭間から」『岩波講座 日本歴史』第二二巻史料論（テーマ巻二）岩波書店、二〇一五年、二〇九―二四一頁）。

（さかもと・こうた 南九州市世界の記憶推進室主任主査（学芸員））

要 旨

特攻隊員を見送る場面として知られている写真は、昭和20（1945）年4月12日に知覧高等女学校生徒が特攻隊を見送った際に撮影されたものである。本稿では、桜の枝を手を持っていることの背景と、戦後この写真が知られるようになった経緯について考察した。

桜の枝は、三角兵舎内に生けたり、出撃する特攻隊員へ手渡すために女学生らが用意していたものであった。当時の報道では、写真キャプションで説明されていた程度であったが、戦後20年目に発行された出版物に写真が大きく掲載されて以降、様々な媒体によって度々用いられてきたことで認知度が高まりイメージが定着していった。

知覧高女なでしこ会の方々からの証言では、見送りは自発的であったという。下を向いてまっすぐ見られなかったという解釈は、戦後に取材を受ける中で強調されるようになったと思われる。現場での検証から、写真が撮影された場所は戦闘指揮所から西へ約100mの場所にあつて、女学生らは溝状の道路内に並び、カメラマンは溝の外側の高い位置から撮影したことを推定した。写真の後方に写っている機体は、第20振武隊の次に出撃を控えた第43振武隊の飛行機が出撃前の整備をしている様子であると考えられる。

<Summary>

Examination of the photograph, “Farewell to kamikaze pilots”

The photograph of the Chiran Junior high school girls waving farewell to the departing kamikaze pilots was taken on April 12, 1945. In this paper, I examine the significance of waving cherry blossom branches to departing kamikaze pilots and how this photograph came to be known after the war.

The branches of cherry blossoms were prepared by female students and arranged in the pilots' triangular barracks. They were also given to the kamikaze pilots before they went out on sorties. In the press of the time, only a simple caption accompanied the photograph. Since then, from around 20-years after the war, the photograph has been widely published and used frequently by various media. This has led to the photograph becoming readily recognizable and establishing it as a historical artifact.

According to the testimony from students of Chiran Girls' Junior High School who were members of the “ Nadeshiko ” volunteer unit, seeing the kamikaze pilots off was voluntary. Various interpretations have been proposed to explain why the female students seem to be looking down and not directly at the pilots of the plane. This point was probably emphasized during interviews with the Nadeshikokai after the war. From on-site verification, we estimate that the photograph was taken about 100 meters west of the combat command post. The female students were lined up on the channel parallel to the runway and the photographer shooting from a higher vantage point above the channel. The aircraft in the background of the photograph are thought to be the 43rd Squadron making preflight checks before their sorties after the 20th Squadron planes.